

## 永井荷風『アメリカ物語』論

戴, 煥  
人民大学外国語学院

<https://doi.org/10.15017/16040>

---

出版情報 : Comparatio. 9, pp.9-14, 2005-07-20. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 永井荷風『アメリカ物語』論

戴 煥

はじめに

アメリカとフランスでの遊学体験が荷風文学の形成に大きな意味を持ったことはすでに説かれて久しい。荷風が在米時代に書き記し、帰国直後に纏め上げた短編集『アメリカ物語』（一九〇八年八月、博文館）には「自らの進むべき方向を模索する苦悶の報告書といった面」（中村良衛七十一頁）も見られることから、荷風文学を理解する上で非常に重要な作品として注目される。最初に西洋の地を踏んだ明治作家の一人として、荷風がアメリカでの異文化体験によっていかなる文化的衝撃を受け、またいかにその種の精神状態を表象したのか。以下、これらの問題を念頭に『アメリカ物語』のいくつかの作品について考察してみたい（注）。

アメリカン・ドリームの破局

『アメリカ物語』を成す二十四の短編はそれぞれ独立した話ではあるが、内容的構造的に連なっている。この点に留意しておくことは、この短編集を解読するのに重要であることを指摘しておきたい。

第一篇「船房夜話」は、シアトル行きの船中で語り手を含む三人の船客が「渡米の抱負」を語り合うといった、第一篇にふさわしいアメリカン・ドリームに関する話である。まず、柳田と岸本という二人の主人公の洋行

に至る経緯の設定に注目したい。柳田はすでに洋行した経験をもっているが、日本に帰ってから、思ったとおりに重用されないばかりか、洋行帰りという誇らしい身分をもって子爵の令嬢を妻にしようとするも、またも「島の大学卒業生」に負けてしまう。それでアメリカ行きを決心したのであった。一方、岸本は学歴がないせいで会社にリストラされたので、妻を説得しその資産でアメリカ留学することになったのである。こうした二人の経歴には連続性があると考えられる。柳田の一回目の洋行失敗譚は、まさにアメリカ留学に出世の夢を賭けた岸本のその後を予言している。一方、財産も思いやりもある岸本の妻は、まさに柳田が帰国後の「不平」を慰めようとして、「目掛けた」理想的な妻に相当する。つまり、岸本は洋行して学位を取っても、柳田と同様、出世の夢を必ずしも実現できないし、柳田も子爵令嬢を娶っても、不平をさげすめることはできないであろうことが、二人の経歴設定から読み取れるのである。このような出世を夢見る男性は、結局、日本社会での不遇から洋行するが、帰国後依然として不遇の憂き目にあい、また洋行するという悪循環に陥っている。アメリカン・ドリームはあくまでもドリームで、渡米によって出世を実現することはないのである。

では、洋行帰りとしてのプライドを粉々に砕かれた柳田であるが、何が彼をしてなお洋行へ夢を託させたのか。言い換えれば、何が日本人の男たちをして、洋行で出世を達成できると信じさせたのか。小説の中では、柳田は洋服を着、シガーを吸い、ウイスキーを好み、英詩を口ずさんでいるような、非常にハイカラな人物として設定されている。そして「大陸の文明」を「賞賛」し、日本のことを「豆粒のような小さな島国」だと過激に「罵倒」する人物になってはいるが、小説は彼をして西洋や日本に関する具体的な文明論を何一つ述べさせていない。このことは、柳田の西洋崇拜

があくまで日常的なハイカラ好みにとどまっていることを暗示している。彼は漠然とした西洋崇拜によってしか、洋行帰りとしての優越感を保てないのである。横浜の会社から派遣された以上、彼ははずれは日本に帰らねばならない。したがってアメリカに行くのは、彼が言うように「事業ということに付いちや、どうしても海外に行かなければならない」ためではなく、やはり箔をつけるためであろう。また、柳田とは反対に「洋服に慣れない」で和服を着ている、見た目では非常に日本的な岸本も、アメリカン・ドリームを抱いていることに関しては柳田と一致しているのである。

ここで重要なのは、テキストが二人にどんな態度をとっているかということである。雑談会の進行中、海は暴風雨で荒れていた。だが、語り手の「私」は、「窓や戸へ帷幕を引き蒸気の温度で狭い船室の中を暖かにして、安楽椅子へ凭れながら外部の暴風雨を聞いていると、却ってそれとも無しに冬の夜に於ける炉辺の愉快が思い出される」。ほかの二人がそれは大船に乗って「自分の身体が安全だと云う事を信じている」からだというところ、「私」も納得し、さらにこういう。「何事に寄らず皆んな然うですよ。一方で愉快を感じるものがあれば、其の為に一方では屹度苦痛を感じるものが起るです。火事なんぞは焼かれるものこそ災難だが、ほかのものには三国一の見物だからね」。つまり、語り手の「私」は二人の話に対して、対岸の火事を見るような冷静さと好奇心をもちながらも、一方、同じアメリカ行きの身である以上、それが自分とは、窓外の嵐のように、実はカーテン一枚の隔たりしかないという潜在的危機感も抱いているのである。物語を読んでいる読者の好奇心に応えながらも、その場の危機感を伝えようとしているのが読み取れよう。会話の初めに柳田が「僕なんぞはまさに焼け出された方の組なんだな。焼け出されて亜米利加三界へ逃げ出すんだ」と言うのも、この点を示唆している。後で触れるように、語り手のこのような態度は『あ

めりか物語』全般について言えることである。

第一篇ですでにアメリカン・ドリームの破局を物語っている『アメリカ物語』で、いったいどんな話が展開されるのだろうか。アメリカはといった日本人のどんな問題を解決できるのだろうか。

#### 西洋化できない身体感覚

『あめりか物語』の作品世界においては、理性でコントロールできないある種の身体感覚が前景化されている。それは、男性が命を賭けても求めようとすると、女性から得る「愉快」だったり（「醉美人」）、男妾に甘んじる男性の「性情」（「長髪」）だったり、また生活を壊すような、忘れられない「欲情」（「旧恨」）として表現されている。このような身体感覚を強調することによって、作品は何を浮き彫りにしようとしているのだろうか。次は「岡の上」を分析することで、この問題に迫ってみたい。

主人公の渡野は異性に好かれることに「自分の主義と自分の人格が、世間から重く迎えられる」という時よりも「更に深い快感」を覚え、それに対して「私は如何に自分を弁護しようとしても致し方がない。その一瞬間、その一刹那に、私の情が然う感じたのですから」という。つまり、この「快感」は理由もなく、解釈できないような「感覚」として語られている。彼は秘密裏に女性を買い続けたが、ある日「考えると」、「世間が想像する通りの清い身の上になる事が……（中略）……愉快であると決断し」、「神聖なる」キリスト教徒の看護婦と結婚した。つまり、彼は身体の「感覚」を理性が指し示す理想に服従させようとしたのである。

まず注目したいのは文学者の渡野がキリスト教徒の女性に救いを求めるという設定である。柄谷行人は、日本近代文学の源泉を論じるくだりで、

キリスト教の告白制度によって「内面」が存在させられ、さらにそれによって「肉体」、「性」が発見されるというキリスト教的な倒錯を指摘している。また、日本の近代文学はまさにそれまでなかったキリスト教的な、抑圧された「性」を「告白」することによって成立すると柄谷は言う。渡野が、肉欲に罪意識を覚え、妻に「今迄の罪悪を残り無く懺悔して」彼女の愛によってわが身を救おうとした設定は、柄谷が指摘した日本近代文学の起源を想起させる。アメリカのミッシヨンスクールで「私」に自分の話すという体裁を取っている渡野の結婚物語は、実は明治文学者がキリスト教を受け入れる場合に出会った抵抗とそれによる苦悩の話として読んでいいだろう。冒頭の部分で「私」も渡野もキリスト教を「信じようとして未だ信ずる事が出来ない。然し信ずる事の出来た暁には、如何様に幸福であろうか」と思う状態にあることに触れるのも、この点を示唆している。ここで、彼らのキリスト教志向に対抗してくるのは、ほかではなく彼ら自身の「身体感覚」なのである。

結婚後、渡野は妻に対して尊敬の念は起こし得たが、「かの暖かいやわらかい恋愛の情は如何しても沸いて来ない」。彼は身体「感覚」の存在の大きさを実感する一方である。例えば夫婦一緒に散歩する場面について、渡野はこう語る。「夢のような麗らかな春の日です。青空は玉の様に輝き、桜や桃の花は今を盛りと咲き乱れ小鳥は声を限りに歌って居る。若い血潮の燃える時は此春ならずしていずれにありましょうか」。つまり、彼の文学者としての感性はすでに「燃える」用意は調えたが、強いてこの感覚を、理性的に選んだ対象である妻に注ごうとすると、身体はついて来ない。妻にキスした彼は「雪の様に冷たく」感じ、「何の故か自分ながら解りません」が、「不快な嫌悪の情がむらむらと沸き起こった」のである。一方、彼は燃える情熱を別の対象に感じる。「爛漫たる桃の花の間」に昼寝する若い女中の

姿を見つければ、彼は「もう世の中の事も自分の身の上のことも何も彼も忘れ」  
「燃えるような頬に触って見たいと、私の身の中を流れて居る血が私に慙く命令した」ように感じる。その後も、渡野の理性と感覚の戦いが続く。「私は半分夢中で如何にかして彼女に対する嫌悪の情を取り去りたいと焦れば焦るほど、事実は増々悪くなるばかり」。妻は彼の幻覚の中では深夜に真っ白な服を着てその枕元に立つ不気味な存在となった。つまり、身体感覚に対して理性は非常に無力なのである。ここで、身体感覚が理性的志向に反逆するだけの力を持つ大きな存在であることが、渡野の結婚生活によって表象されているのである。

では、このような理性的志向と身体感覚の矛盾ははたして解決されるだろうか。渡野はアメリカに渡って、ミッシヨンスクールで修業生活を送る。つまり、彼は本場のキリスト教文化の環境に身を置くことで、理性についていかなない身体感覚を馴らそうとする。が、やはり「不安」である。牢獄の囚人が聖人でありえないように、禁欲しているだけではなんの意味もないと彼は考えたからである。そこで彼は再び都会の生活にもどって身体感覚を確かめて、それにしたがって暮らしていくことにした。

「岡の上」では、身体感覚は理性的志向に対立したものとして浮かび上がっている。これは、明治の文学者たちの、西洋化しようとする精神的志向とその感受性とのギャップを表象していると言えよう。たとえ理性的に西洋文化を受け入れようとしても、たとえ外的環境が西洋的なものになっても、感受性そのものが理性にしたがって西洋化されることにはできない。だが、だからといって、逆に理性を身体感覚に従わせることもはやできない。渡野が妻から離れてアメリカで結婚前の生活をする代わりに修業生活を営むことは、この点を暗示している。

理性志向と身体感覚とのジレンマに苦しむ明治の文学者渡野。わたしは

そこに荷風の影を見ないではいられない。小説では主人公の渡野は結局身体感覚にしたがつて暮らすことになった。荷風も帰国後、一連の江戸情緒に満ちた作品を書いたが、それはまさに西洋化できない感受性への回帰と捉えられないだろうか。

#### アメリカと妖艶な娼婦

未知なるものを見聞して、精神的に大きな衝撃を受けた場合、人間は既知のものに寄りかかってそれを認識し記述するしかない。日本とはまったく違った近代工業文明下のアメリカの世相に対して、荷風もそれまで小説でよく取り上げた女性問題を切口に、受けた印象や衝撃を表現したと思われる。

「寢覚め」は紐育支店営業部長沢崎とアメリカ人部下ミセス・デニングの話である。沢崎はアメリカに来て半年になり、「境遇の寂寥を感じる」ばかり。仕事で気を紛らわそうとすると「何処か心の一部に大きな空洞が出来て其処へ冷たい風が吹き込んでくるような心持がするのである」。アメリカでの生活は彼にいろいろなことを反省させ、これまで問題でなかったことを問題として脳裏に浮かび上がらせた。が、「殊に煩悶だの、沈思だのと、内心の方面に気を向ける事は男子の恥と信じた過渡期の教育を受けた身は猶更の事、彼は遂に自ら大笑一番して、いや此様妙な心持になるのも、つまるところに不自由しているからだ」と我身を賤しく解釈して僅かに其の意志の強さに満足しようとした。ここで注目したいのは、小説が三人称自由間接話法で語られていることである。語り手は沢崎の視点に即しながら、彼の内心を説明・解釈・批評したりしている。上に引用した「我と我身を賤しく解釈して」というところは実は語り手の解釈である。つまり、沢崎

の「煩悶」「沈思」は、決して彼自ら解釈したような「女」の問題から来たものではなく、それはむしろ異文化の風土に暮らすことよって生じた複雑な心理状態からきたものであり、「女」の問題はそれを表現する手段であることを読者に暗示している。この点は先に触れた、婚姻状態にある知識人の心理状態（「女」に対する感覚）を表現している点に呼応している。実際に、荷風の初期代表作の「地獄の花」（一九〇二年）、「夢の女」（一九〇三年）から後の江戸情緒の代表作「溼東綺譚」（一九三七年）、「腕くらべ」（一九四六年）に至るまで男性の目から見た女性が常に表現対象になっている。女性は、荷風が世界を表象するある種の装置のように見える。「寢覚め」では主人公沢崎の心情を「賤しく解釈」することによって、彼にとつての「アメリカ」という複雑な問題を、「女」の問題にすり替えて表象しているのである。

ミセス・デニングは沢崎の事務所が雇った若いアメリカ人で、彼の「胸を躍らせた」存在であるが、なかなか打ち解けられない。ある日たまたま出会い、無理やりに川端へ散歩に彼女を誘った。「沢崎は詩も歌も知らない身ながら、美しく若葉の夜の何となく風情深く、人なき腰掛に手こそ取らね、女と居並んで話をして居る事、それだけが非常な幸福の如く感ぜられて、話の材料などは一向に選ぶ処ではない」。だが、デニングが話し出すとそれが「西洋人の露出な痴話」だと思い、「饒舌な西洋婦人」の「奥底な」い話に「辟易」するようになる。また彼女が辞職すると、「なんと云う我儘……日本人と見て馬鹿にする、と在米日本人の常として、直様な愛国的僻根性を出し沢崎は大いに腹を立てた」。だが、「さて五日、十日と経って見ると、去る夏の夜ハンドソンの河畔の腰掛に話しをした一条は自分の身にはあるまじき小説のような心地がし出す」。さらに考えてみると女は「自分を誘ったのである」としか思われぬ、「遺憾の念が一層深く」なるようにな

る。

沢崎はやっとデニングと接触する機会を得ると、真のコミュニケーションが何一つないにもかかわらず、自分の想像だけで既に「幸福」に感じる。しかし、デニングが実際に自己表現をすると、彼はすぐ「西洋人」共通の欠点を見出してしまふ。つまり彼女を、自分の想像あるいは先入観を通してしか見ないのである。また彼女が彼の意に背くと彼の反応も「在米日本人の常」である。時間が経つとまた幻想し始める。ようするに、小説の中では沢崎がデニングに対してまず憧れ、それから先入観をもって接触し、のちに憧憬と軽蔑とが入り混じった感情を抱くに至る。デニングは沢崎にとって、魅力的でありながら妙に理解しがたい、しかも近づきがたい存在となっている。デニングという人の正体は最後まで明らかにならず、違う視点の人の口からしか語られていない。デニング自身は「怠け癖が付いて了った」から軽い仕事にも出たくないというが、彼女の亡き夫の目には「土耳古や波斯の美人のように薄い霞のような衣服を着て大きな家の中で泉水へ落ちる水の音に昼の中もうつりと夢を見て居る女」であり、またその大家の話では「あんな根性の太い奴はありません。：（中略）：一日女郎の腐ったような乱次もない風をして：手前の家一ツ掃除もしないで野良々々暮らして居た」。このようにミセス・デニングは実体もなく、多面鏡のように、異なる角度からそれぞれ違って見える存在として設定されている。

小説の結末はこうなっている。「以後、沢崎三郎氏は人から米国に関する其の意見を訊かれる時は何によらず、必ず次の如き論断を以て話を結ぶのであった。『つまり米国ほど道徳の腐敗した社会はない。生活の困難な処から貞操など守る女は一人もないと云って可い位だ。到底君子の長く住むに堪える所では無いです。』ここで重要なのは、デニングに対する批評がそ

のまま沢崎のアメリカに対する意見となっていることである。小説は、「女」の問題をアメリカに対する印象に結びつけ、デニングという女性がすなわち沢崎の目に映ったアメリカの表象であると、再び読者の注意を呼び起こしているのだと読み取れよう。それは、まさに沢崎が見た色写真の中のミセス・デニングのような存在である。誘惑を感じながらも真に近づくことができない。理解しがたい存在として軽蔑しながらもそれに魅かれていく。また、写真はあくまでも写真で、実体はない。それに対する感覚はすべて見る側の想像によるものである。

## 結 び

『あめりか物語』で、荷風はいかなるアメリカを描いただろうか。まず、アメリカン・ドリームは日本人側の勝手な想像にすぎず、日本人の西洋文明に対するぼんやりとした崇拜によるものである。また、精神面では、アメリカは西洋キリスト教文化に憧れた明治の文学者の精神的な棲家にはならないばかりか、理性と同様に西洋化できない身体感覚の存在の大きさを彼らに実感させたのである。アメリカは日本人にとって、あたかも男性の目に映ったポルノグラフィーの中の妖艶な娼婦のような存在である。誘惑に満ち、男性がたとえ軽蔑しながらも憧れを禁じえない、近くて遠い存在であり、男性はそれを見る過程において自らの赤裸々な精神状態を見つめることになる。

『あめりか物語』の中のアメリカは「人間社会の善悪の両極端を見る事の出来る所です。人は何方へなりと随意に好む方へ行く事が出来」（岡の上）るといふぐあいに、いわば透明な異国であり、そこで人間が文化、習俗ないし道徳的な束縛から解かれて生活することができるように描かれて

おり、それによって日本人の赤裸々な精神状態が浮き彫りにされたのである。ここでは、アメリカは実体としてではなく、明治日本人の精神状態を映し出す反射鏡のように描かれているのである。

(注) テキストは『あめりか物語』(講談社文芸文庫、二〇〇〇年)による。

【参考文献】

磯田光一 『永井荷風』 講談社、一九八九年一月

太田三郎 「荷風の知られざる在米時代―新資料による解明―」、坂上博一

編 『日本文学研究大成 永井荷風』 国書刊行会、一九八八年六

月所収

柄谷行人 『日本近代文学の起源』 講談社、一九八八年

菅原克也 「放蕩息子の帰還―永井荷風の西洋体験と日本再発見」、平川祐弘

編 『異国への憧憬と祖国への回帰』 明治書院、二〇〇〇年九月

所収

竹盛天雄 「年譜―永井荷風」、『あめりか物語』 講談社、二〇〇〇年五月所

収

中村光夫 『評論永井荷風』 筑摩書房、昭和五十四年

中村良衛 「荷風の文体―林間(『アメリカ物語』所収)を中心に」、『国文学

解釈と鑑賞 特集永井荷風を読む』 至文堂二〇〇二年十二月所収